平成 22 年 2 月 20 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
平成 22 年　第 2 回講話

先ほど論語を素読して戴きました。非常によろしいと思いました。中身も見えてきていると感じました。素読論語のレベル（自分がどの位置にいるか）は、まず読めることです。素直に読めれば入門です。次に自分の好きな言葉が見つかったら中のレベルです。好きな言葉が見つかると、常時それを頭の中で考え、口の中でこだまするので、何か判断を迫られた時にそれによって判断ができる状況になります。最後に上のレベルになると、素読をしていて情景が目に浮かぶ。そうなれば後は自分で好きなように学んでいけばよろしい。

恒例の質問

では、恒例の質問を致します。

○　昨日一日、嘘をつかなかった方？

（・・・沢山手が挙がる）

リップサービスか何か言われたのでしょうか。若干、手があがらない方がおられました。

○　昨日一日、良い日だったと思う方？

（・・・沢山手が挙がる）

良い日の中身ですけれども、他人の為に何かしてあげて良かったというのと、自分の為に何かして良かったと思うことを分けようと思います。

○　他人の為に何かしてあげて、良い日だったなと思う方はおられますか？

人の為に何かしてあげると、人は心の奥の方で良かったなと感じる。これは脳の仕組みでそうなっているそうです。自分の為に何かして良かったと思うのと、両方あると更に結構ですね。

○　有難うと言い、有難うと言われた方？

有難うと言われた方が多いので、非常に結構なことだと思います。有難うと言われるのは、自分が他人の為に何かしてあげなければなりません。それが無私で出来ると更に良いと思います。

いのち・出会い

北関東フォーラムの会員の春山さんが亡くなられました。お元氣でしたので、これからも相当色々な事業を展開していかれるだろうと思っていました。非常に残念です。あの世に逝かれたら、もし魂があるなら、どうぞその中で御活躍戴きたいと思います。

先日、群馬経済同友会の講演会に行きました。上甲晃さんという方が松下幸之助さんについて話をされました。上甲晃さんは松下電器から松下政経塾に出向し、14 年間、松下政経塾で仕事をし塾頭になられた方です。

上甲さんは 70 歳を過ぎて、あの世に逝ったら松下幸之助さんに褒めて貰えるだろうと思っていたそうですが、今のままでは褒めてくれないだろうとハッとしたそうです。なぜならご本人は政経塾で 75 名の議員さんを育てたけれども、最近の政治情勢を見るに、自分が育てた政治家達が何という体たらくかと感じたそうです。沢山の政治家を作るよりは、本物の政治家を一人作ることが必要なのだとつくづく思っていると言っておられました。上甲さんの日常生活では、松下幸之助さんと会ったならこういうことを言おうと、松下幸之助さんとの会話が自然になされていたのだと思います。この世に生きている人とあの世との間が、何か非常に近しい感じがします。

もう一つ、上甲さんのお話の中で出会いに関して印象に残った話がございます。本氣で求めないから出会いがないのであって、＜本氣で求めれば、必ず出会いはある＞という話です。松下幸之助さんは「本氣で求めれば必ず出会えるものだ」と口癖のように言っておられたそうです。

知足

中斎塾フォーラムの基本哲学は「知足」です。「足るを知る」という言葉がピンと来ない場合は、「ほどほど」と覚えて戴ければよろしい。中斎塾フォーラムでは、自然とものを見る眼を養い、どう行動すればよいか考える癖がつく。そして一段階上れば、実行する習慣が出来てきます。行動までしておかないと、なかなか知足というところには参りません。

論語から今を見る

本日の論語は公冶長 7〜11 です。

【七】　孟武伯問う、子路は仁なるかと。子曰く、知らざるなりと。又問う。子曰く、由や、千 乗 の国、其の賦を治めしむべし、其の仁を知らざるなりと。 求 や何如と。子曰く、求 や、千室の邑、百 乗 の家、之が宰たらしむべし、その仁を知らざるなりと。赤や何如と。子曰く、赤や、束帯して 朝 に立ち、賓 客 と言わしむべし、其の仁を知らざるなりと。

イメージが浮かびますでしょうか。私が浮かんだイメージは、孟武伯という人が立っていて、相向かいで孔子が立っています。二人が話をしている後ろに、三人のお弟子さんが立っている。孟武伯が後ろに立っているお弟子さん三人を指しながら、「この者たちはどうですか」と孔子に聞いている、そんなイメージが浮かびます。

孟武伯が、「子路は仁者（思いやりがある人）でしょうか」と聞きました。

孔子は「そういうことは知らない」と答えました。

更に尋ねたので、孔子が答えました。

「子路は、軍人として、戦車 1 千台を出せるような大きな国の兵隊を教育訓練するのであれば、素晴らしい成果を上げるであろう。但し、仁者かどうか私は保証しがたい」

次に「冉有はどうでしょうか」と聞きました。

孔子が答えました。

「千個の家があるような集落（今の日本で考えれば、小さな都市程度）のトップや、戦車を百台くらい出せる貴族の家の家老のポストにもっていけば、能力を大いに発揮するだろう。（つまり官僚のトップにもっていけば良いということです）しかし、冉有は仁者であるかどうか私は知らない」

次に「公西華はどうですか」と聞きました。公西華は恰幅が良く、着ているものも豪華で、見るからに貫禄のある重々しい感じの人物です。

孔子が答えました。「公西華は礼装を着せて朝廷に立ち、お客様の応対をする。外交交渉をすると素晴らしい。但し、仁者かどうかについては保証しない」

何度も言っていますが、論語は現代に置き換えて考えてみると良い。

日本の軍人のトップは誰でしょうか、顔が浮かんで来ません。例えば警察庁長官の顔が浮かぶ人は少ないでしょう。これも一つに日本の国の悲劇だと感じます。

官僚のトップは官房長官でしょうか。テレビに時々顔が出ますが、果たして能力があるかどうか、はたまた仁者かどうか、考えてみるのもよいでしょう。

岡田外相の顔はよくご存知でしょう。これも任に適か不適か考えてみるとよいでしょう。

【八】　子 子貢に謂いて曰く、女 と回と孰れか愈れると。対えて曰く、賜や何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞きて以て 十 を知る。賜や一を聞きて以て二を知ると。子曰く、如かざるなり。吾と 女 と如かざるなりと。

孔子と子貢がお茶でも飲みながら雑談をしているようなイメージが浮かびます。

孔子が子貢に「お前と顔回と、どちらが弟子としては優秀だと思うかね」と聞きました。

子貢が答えました。

「私如き凡才が、どうして顔回を超えるような能力があると思うものですか。顔回と私では、桁が違いすぎます。顔回は一を聞いて十を知る。私は一を聞いて二を知るだけの凡才です。」

一を聞いて一を知るのは、大変な能力です。一を聞いて二まで分かってしまったら、大変な傑物だと思います。それを謙遜しつつ言っているのがおもしろい会話だと思います。

孔子が言いました。

「そうだね。お前は顔回には及ばない。私もお前と同じで、顔回の能力には及ばない。その部分は私もお前も同じようなものだよ」

孔子から見て顔回は、それほど優秀な弟子であったわけです。

これだけ師匠から褒められるような人物が、今の日本の中にいるでしょうか。かつて、吉田茂という政治家がいました。吉田茂のところに集った政治家は、皆、横並びで、傑出した人はいませんでした。異端児はいました。田中角栄です。田中角栄という人は、一を聞いて二は分かるでしょうし、かなり頭の回転が良かった。こういう人物は日本の歴史上かなりいたと思います。ただ、一を聞いて十を知るくらいの頭の回転をした人は、大概、人生を全うしないで途中で非業の死を遂げていることが多いようです。河井継之助もそうです。

ここでは孔子が、子貢と顔回のようにお互いにライバルとして切磋琢磨する人間がいることは良いと言っていると感じます。

河井継之助と小林虎三郎の関係はご存知でしょうか。河井継之助は越後長岡藩が生んだ傑物と言われています。長岡藩は官軍と戦って負けて、焼け野原になりました。その時の総大将は河井継之助ですから、これだけ酷い状況に導いたということで怨嗟の声が上りました。小林虎三郎は同じ越後長岡藩で、河井継之助とは親戚関係でライバルでした。河井

継之助は長岡藩を焼け野原にして死んでしまいましたが、その後を受けて小林虎三郎が復興に努力をしました。そのような中で、長岡藩の支藩から救援の米百俵が届きました。それを食べてしまえばなくなってしまうということで、小林虎三郎は米百俵をお金に替えて、子供たちの教育に当てました。結果、長岡藩からは続々と人材が輩出しました。この話は山本有三が戯曲を書いて有名になりました。それを小泉元総理が米百俵の精神ということでとり上げて、教育は大事だということを世の中に主張しました。

河井継之助と小林虎三郎は親戚同士、ライバル同士で、同じような百石取りの家系に生まれました。人生の節目は面白いもので、河井継之助は才気走って色々な提案をするので上の者に叩かれますが、めげずに出し続けた提言書が藩主に認められて出世していきました。小林虎三郎の方は、同じ時期に藩主が求めた提言・提案を書いて出したところ、急所を抉られたような内容だったので、危険な提案をすると疎まれて左遷されました。同じ時期に同じように提言書を出して、氣に入られた方は出世し、片方は左遷されました。それだけ見ると悲喜交々ですが、人生万事塞翁が馬と申しますように、一巡り、二巡りして河井継之助は戦死をし、小林虎三郎は病を得ながらもその後は長生きして、河井継之助と並び称されたライバルとして地元には残っています。

人間はやはり一人だけでは伸びないようです。負けたくないというライバルがいると、必死になって学ぶし努力する。そういう人物を作っておくことが必要だと思います。

【九】　宰予 昼寝たり。子曰く、朽 木は雕るべからず。糞土の 牆 は杇るべからず。予に於てか何ぞ誅めんと。子曰く、始め 吾 人に於けるや、其の言を聴きて其の行を信ぜり。今 吾 人に於けるや、その言を聴きて、その行を観る。予に於てか是を 改 むと。

宰予が昼寝をしました。

それを聞いて孔子が言いました。

「ボロボロになった木は、彫る事はできない。かさかさに乾いた土で作った土塀は、上塗りは出来ないものだ。人間も性根が腐っている人間を、何とかものにしようと努力しても無理だ。宰予をいくら責めても仕様がない。私は人と付き合いをする時に、話をする内容を聞いてその人を信じていたが、宰予の言動を見て、言うことを聞いて信用するのではなく、行いを見て信ずるに足るか足らざるかを判断する。宰予の失敗で、考えを改めたのだ」

宰予が昼寝をしているからといって、何故、孔子がそんなに怒るのかという解釈をしている学者もいます。渋沢栄一さんは『論語講義』で、おそらく自分の体験と照らし合わせたのだと思うのですが、宰予が昼間に女性を連れ込んでいたのだろうと書いています。孔

子は謹厳実直ですから、それで怒って、宰予は信じられないとなったのでしょう。

これは人物の観察法についての話です。

視・観・察が孔子の主張した人物の観察法です。まず、視。その人間がどういうことをしているか、よく視る。次に、どういう行動をとっているか、言行一致かどうかを観察する。最後に察。その人間がどういうところで満足するのかを見る。上っ面の動機だけ、人によく思われたいとか、私利私欲で行動している場合には、満足のポイントが違ってきます。ですから人間を見る時には、言葉だけで信用しないで行動を見ることが肝心です。行動を見たなら、それが偽善者としての行動か、本当に無私の立場で行なっている仁の行動かを見なさい、ということで孔子は視・観・察を推奨しています。

【十】　子曰く、吾　未だ剛者を見ずと。或ひと対えて曰く、申棖ありと。子曰く、棖や慾あり。焉んぞ剛なることを得んと。

孔子が言いました。「私は未だ、意志が強固で強い人間を見たことがない」

或人が答えました。「申棖がいるではありませんか」

孔子が「申棖は欲が深い。どうして強いと言えるものか」と答えました。

今の民主党でここを解釈しますと、或る人の「豪腕の小沢がいるではないですか」という言葉に対して、「欲に負けて、己の意思を曲げやすいからだめなのだ」と孔子が言っているとお考え下さい。

論語に「剛毅木訥仁に近し」という文言があります。剛者（意志強固で強い人間）だけなら良いのですが、ただ意志が強固で強い人間は、結構欲が深い場合がありますから、人とお付き合いする場合は、表面だけ見ないでその人間が何を考えているかを察するようにした方が良いとお読み下さい。

【十一】　子貢曰く、我 人の諸れを我に加うるを欲せざるは、吾も亦諸れを人に加うる無からんことを欲すと。子曰く、賜や 爾 が及ぶ 所 に非ざるなりと。

子貢が孔子に向かって言いました。「私は、他人が私に対して仕掛けて欲しくないと思うことは、自分も人には仕掛けないようにしたい」

孔子が言いました。「お前はそう言うけれども、果たしてできるのかね。（お前には出来

ないだろう」

論語に「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」という文言があります。これは似ていますが、まるっきり違います。自分が人からやられたら嫌だと思うことは、人にもやらないようにしたいという意味です。これは自分の意思だけで結論が出ます。

子貢は頭の回りが良くて金儲けも実に上手でした。そういう人はつい、勇み足があるから、お前には無理だと孔子が諭しています。

知識・見識・胆識　― 本物の経営者になるには不況が一番 ―

先ほどもお話した上甲さんの講演会で、私が非常に良いなと感じた科白があります。松下幸之助さんが口癖のように言っていた「本物の経営者になるには不況が一番だ」という言葉です。上甲さんが松下幸之助さんから聞いた中で、非常に印象深く残っている話として紹介しておられました。不況にぶつかって沈んだら本物の経営者ではない。それを乗り越えて発展していく過程で、本物の経営者になってゆくというものです。

又、松下幸之助さんは「人は自分の事しか考えられなくなったら、必ず行き詰って滅びるものだ」ということも言っておられたそうです。やはり松下幸之助さんという方は、後々に残るような話をするものだと感心致します。

上甲さんは 14 年間松下さんに仕えていて、大変怒られた事があるそうです。それは、「最近どうや」と聞かれて、「変わりありません」と答えたところ、「何たる言い草だ。そこに咲いている花だって、毎日毎日咲くための努力をしているから咲いているのだ。人間も会社も、毎日毎日努力するからこそ生成発展していくのであって、変わりないというのは何たる言い草だ。月給返せ」と怒鳴られて、脂汗を流したそうです。人間は、昨日と同じ平穏無事で良かったと思っている人もいれば、昨日より今日がこれだけ良くなった、今日より明日はこれだけ良くなりたい、良くなった・・・ということを繰り返す人がいると思います。松下幸之助さんは後者を地でいった人だと思います。

これらは私にとっては知識です。知識を沢山入れたらば、自分はどうするか決めるのが見識です。そして実行まで行ったら胆識になります。

昨年は景氣が悪い。今年は更に悪い。来年は断崖絶壁を転げ落ちると数年前から言い続けています。では、その先はどうか。転げ落ちたらそのままです。昔考えていたような景氣の復活はありません。朝鮮特需のようなものが外国から転がって来れば話は別ですが、まずないでしょう。崖を転げ落ちて景氣が酷くなれば、そのままずっと続いていくと思っ

ています。そのうちにそれほど酷いものではないと思いますが、ハイパーインフレが始まると思っています。

調べてみると、日本のインフレ率で一番高かったのは 182.2%です。他の国を見ると、ロシアは 7000%、アルゼンチンが 6000%ですから、それに比べれば日本のインフレは赤ん坊のようなものです。最近で最も酷かったのはトルコです。瞬間的に 15000%のインフレになりました。日本の場合の 182.2%は、戦前と戦後の物価で考えてみると、60 倍から 80 倍だと言われています。戦前 100 円だったものが、戦後 8000 円になりました。物価がどんどん上っていくと、政府は公定価格とヤミ価格の中間くらいで何とか収めようと努力していました。ところが最終的にはどんどんヤミ価格の方に擦り寄って行って、ヤミ価格と公定価格が同じようになっていったというのが、昭和 23、4 年頃の話です。

又、同じことが起きると思っています。ロシアやトルコのようにハイパーインフレが起きなくても、物価が 70 倍 80 倍になるということは十分あり得ると思っています。何度もお話していますが、ロシアで老後の為に 1 億円貯めておいたご夫婦が、凄まじいデノミで、1 億円が 10 万円に変わったしまった。当然、飢え死にする人が続出し、自殺者も多数出たわけです。同じ頃、ロシアで 1 億円をドルで預金をしていた人は、混乱が収まった時には 7000 億円に化けていた。ですから新興成金が生まれました。

これから 10 年くらいは、日本は滅茶苦茶な嵐の中に入ります。中いる人達は、当然、揉みくちゃにされると思います。そうなると体力のない人はすぐ死にます。やる氣のない人も生き残れません。体力・氣力・知力が充満している人は、嵐に対して立ち向かえる。＜10 年くらいはすぐに経ってしまう、その間は体力も氣力もある＞という人は嵐を乗り越えて、「本物の経営者になるには不況が一番」という松下幸之助さんの言葉が、そのまま活きると思います。酷な言い方ですが、今くらいの不況で音を上げていたら、これから来る嵐には立ち向かえなくなります。ですから、＜何のこれしき＞と自分自身の氣力を奮い立たせて、尚且つ、体力もがっちりあるという人間が、これから 10 年間生き延びてゆきます。今が旬だと思って頑張れる人間が生き残れる、と思って戴いて間違いないと思います。ずっと旬でゆきたいですね。くれぐれも自分で、「朽木は雕るべからず。糞土の牆は杇るべからず」のようにならないように努力をして戴きたい。

知識は出来るだけ仕入れた方が良い。ご紹介した松下幸之助さんの言葉のように、良いなと思えば感動するわけです。感動しなくなったなら、かさかさに乾いた糞土の牆になってしまいます。常に潤いのある心が良い。それは出来る限り良いなと思う言葉や人に出会うことです。そうすると自分もいつまでも瑞々しく生きていられるし、今後 10 年間は対

応が可能だと思います。

**　以上で本日の講話を終了致します。有難うございました。**